

茅野 友子 CHINO, Tomoko

58 年人文科学科卒(2 期) 72 年大学院教育学研究科修士課程修了

私が ICU という大学の存在を知ったのは 1952 年、高校 2 年生の時でした。ある朝、新聞を読んでいた父が急に大きな声で「友子、お前の行く学校が見つかったよ！」と見せてくれたのが、「国際基督教大学という名前の新しい大学が 1953 年に開学する」との記事でした。その瞬間から今日までの 68 年間、ICU は自分の人生と切っても切れない存在となりました。今また、同窓会から DAY 賞を頂くことで、ICU がどのように私を導いてくれたかを顧みるよい機会を与えられました。心より感謝申し上げます。

なぜ ICU が自分の行く大学だと直感的に思い込んだのか、不思議なようですが、私にはほかの選択肢は考えられませんでした。それは、この大学のネーミングが全てを語っていると信じたからです。国際性とキリスト教と学問の三つを具現した理想の学校で勉強する以外に自分の未来はないとの確信の裏には、子供ながら戦争中の学童疎開や、九死に一生を得た東京大空襲の悪夢の経験、戦勝国の言語と思考を知りたいとの思いがありました。

幸い入学を許され、まず英語と一般教養科目から始まった ICU の 4 年間は、当時ある教授がいわれた “your formative years”、まさに私の自己形成期でした。そこで出会った忘れ難い先生方のなかで特に人文科学科長の神田盾夫教授の存在は大きく、転科して英文学を専攻したいと申し出ると「それでは貴女によい先生を連れてきてあげよう」といわれました。そのお言葉どおり、3 年生の秋、待望の教授がイギリスから ICU に赴任され、私のアドバイザーになって下さったのです。それがチョーサー研究で第一人者のデルク・ブルワー先生で、ICU には 2 年しかおられませんでした。ご帰国後ケンブリッジ大学イマニュエル・コレッジ長の任に就かれてからも逝去されるまでご指導を受け、また来英の ICU 生たちのために尽くして下さいました。

スイスから来られたエーミル・ブルンナー先生には “challenge and response” という言葉を教えて頂きましたが、先生ご自身がこの言葉の具現そのものの生き方を我々に示して下さいました。ICU 教会で受洗したのも、その時は分かりませんでしたが、その後の自分の生きる道しるべとなり、今に至っています。

同窓生と結婚して 1966 年から海外生活が始まりましたが、その国々がかつての敵国であったこと、また初めての外国がオランダであり、フレイムッシュ絵画の本場でもあったので、あらためて歴史や美術面で ICU で学んだことが試される貴重な経験をしました。

このように、ICU で多くの方々の無償の善意に包まれた教育を受けた私にできることは、教育の場で社会で教会で何らかのプラスの活動をする、研究を続けること以外にありません。最新の研究成果として、2019 年 11 月に『シェイクスピアの時と我々の時』と題する著書を上梓しました。また ICU の学制改革で人文科学科なき今、ペディラヴィウム会(一般社団法人)を研究と交流の場として守り育てていきたいと願っています。

村上 陽一郎 Yoichiro P. Murakami

1972～2008 年在職

3月28日の「桜祭り」の当日、早くから、ある団体の講演会での講演を約束してをり、動かすことが出来ないことが判りました。洵に不調法で、申し訳ない仕儀ではございますが、当日出席して直接御挨拶申し上げることが出来ないことを、お詫び申し上げます。

御 挨 拶

かういふ形でしかメッセージをお伝へできないことを、衷心よりお詫び申し上げます。また、本学の卒業生でもない人間を DAY にお選び下さったこと、まことに光栄で、感謝のほかはありません。

私の ICU との関りは、理学科のカリキュラムの一つ、科学哲学を担当する非常勤講師として勤め始めたことでスタートしました。そのキャリアが長かったので、1995年に、前任の渡辺正雄教授のご退任とともに、東京大学での定年を一年残して着任したとき、ICU はすでに私の中では、母校のやうにさへ感じられておりました。

そのときのことを記しておくのも、何分今まで語ったことがない話ですので、何かの意味があるかもしれません。東京大学で最後となった職場は、大学院横断的な先端科学技術研究センターといふ組織で、そのセンター長をしてをりました。センター長の任期が終れば、定年まであと一年は、そのままセンターに居残ることもできましたし、古巣の教養学部へ戻る選択肢もありました。しかし、どちらも、ポストの極めて窮屈な国立大学で、人事面で少なからず迷惑をかけることになる。さて、と思案してゐるころに、ICU から有難いお誘ひがありました。三鷹に住んでゐる私にとって職住接近、また非常勤で永らくお世話になってきたこともあって、心は傾いてゐましたが、他にもお誘ひ下さるところがないわけでもないことも手伝って、最終的決断に至ってはゐなかつた、といふのが正直なところでした。

秋の一好日、思ひがけない訪問客が、先端研（前述センター）のセンター長室にありました。京都に設立された日文研（国際日本文化研究センター）の梅原猛センター長でした。梅原さんは、日文研に熱心に誘って下さいました。心が動きました。ユニークな研究所として、教育義務もなく、研究環境としては、大変魅力があったからです。しかし。

この梅原さんのお誘ひが、反対に ICU からのお誘ひをお受けする重要な契機となったのですから、我ながら人生の不思議さを感じます。ある意味では、ICU に申し訳ない言ひ方になりますが、率直に言へば、同居する母が九十歳を超えてゐたからです。その母を連れて、京都に新しく生活を始める勇気が出なかつたのです。ICU は、歩いて自宅から三十分、車を使へば二十分で通へます。この対比は決定的でした。その後、母は百六歳まで生きることになるのですが、もし京都へ移住してゐたら、寿命はもっと短かつたに違ひありません。次に来た契機は、やはり、過去からの親しさの濃度でした。新しい未来を拓くことへの私の臆病さが、日文研の魅力を上回つたと言つてもよいかも知れません。

ICU に着任して、初めての出校日、私は大きな衝撃を受けました。人文科の同僚の方々と話をしてあるとき、何気なく「研究・教育」といふ表現を使ったのです。前任の職場では極当たり前の表現でした。耳敏く聞き咎めたある教授の方が、「先生、ここでは順番が違います」と注意して下さいました。最初何を咎められてあるのか、判らなかつたのですが、さう言へば、戴いた研究室のある建物の名前が「教育研究棟」であることに気付いて、ご注意の意味が腑に落ちました。さうなのだ、と肝に銘じました。

信仰遍歴に触れて置ませうか。小学生の頃、内村鑑三の最後の直弟子の御一人が、先生の中にをられて、その日曜学校に中学生まで通ひました。内村の『四福音書の研究』などは今でも座右にあります。高校生になって暫く、遠去つた後、あることに導かれて、公教要理の集りに通ひ、1958年クリスマスに、南山教会で受洗しました。ICUで、宗論的な摩擦を全く感じなかつたのは、エキュメニズムの時代とはいへ、このコミュニティの皆様のお蔭か、その点も有難く思つてをります。

結局 21 世紀 COE プログラムの代表といふこともあつて、大学院教授としての定年を更に一年延長し、七一歳まで、都合十三年に亘つてお世話になってしまいました。前任の渡辺正雄教授の粘り強いご努力もあつて、科学史・科学哲学の講義枠は、退職までは守り通しましたが、その後の展開のなかで、研究所も講義枠も消滅したやうで、その点だけが、力不足の心残りとなつてをります。

重ねて、同窓会の今回のご厚情に、篤く御礼申し上げます。

齋藤 顯一 SAITO, Kenichi

74 年語学科卒 (17 期)

この度は DAY 賞にお選びいただき、誠にありがとうございます。まさか、自分が同窓会長の時に設立した賞に選ばれるとは思わず、“自作自演”になってしまうのではないかと受賞をためらったのが本音なのですが、2006 年から現在まで 15 年間もこの活動を続けてきてくださった同窓生や事務局の皆様へ感謝申し上げるとともに、ICU の知名度・魅力度を高めることに貢献なされた皆様へ肩を並べることができたことをとても光栄に思います。

私は現在、問題解決者の育成を通じて企業の業績を高めることに取り組んでいます。問題解決とは学問ではなく、記憶した知識で与えられた問題を解くわけでもありません。本当の問題解決とは、考え方であり、頭の使い方であると思います。事実データを集めて分析し、本質的な問題を発見し、その意味合いを正しく論理的に理解する。そして成果を実現させるために、人を巻き込みながら行動に移す。問題解決は、組織、団体、企業、ひいては社会をより良くするための考え方です。大きな問題だけでなく、常日頃からこの問題解決的な思考で生活することで、より良い人生が送れる、すなわち問題解決を学ぶということは、生き方を学ぶということでもあります。

私が 2002 年に同窓会長を引き受けたときも、同窓会を「同窓生、在校生、大学にとって魅力的な集まりにしてみたい」という願いをもって、問題解決的な考え方をもとに様々な取り組みを考え、副会長をはじめとする理事・評議員の方々、そして事務局、同窓生、学生の皆様のご協力のもと、評議員や在校生を含めた部会活動の活発化、アラムナイニュースの刷新、学生評議員制度やドリームコンペティションの導入、募金パーティー、DAY などを実施しました。このような取り組みは、時代が変わるにつれ、そのとき必要とされている最適な形へと変化させていく必要があります。これからも、ICU 同窓会が ICU、そして同窓生のためになる活動を実現できる場であり続けることを心より願っております。

“問題解決”とは、言葉にすると簡単に聞こえますが、今の日本の状況を見ると、問題解決的な思考で物ごとを考えられる人は非常に少ないと感じます。1990 年のバブルの崩壊は 1,300 兆円にも上る資産を失うことにつながり、日本の国際競争力は低下したまま回復できていないのが現状です。正しく考える力をもつ人材は、これから先どんどん必要になってきます。問題解決をできる人材が増えることで、より良い組織、より良い社会、そしてより良い日本ができると信じ、これからも問題解決者の育成に邁進していきたいと思っております。

小泉 明郎 KOIZUMI, Meiro

99年人文科学科卒（43期）

「人間とは何者か？」「その人間が作る社会とは？」「神の存在とは？」「真理とは？」「人は何のために生きているのか？」こんな途方もない大きな問いが、ICUでの4年間に私の心の奥底に蒔かれました。瞳を輝かせながら、発掘されたばかりの土器の破片を手に、数千年前の人間の営みへと思いを馳せるウィルソン先生。宗教、信仰、神といった理性を超えたものを徹底的に知性によって捉えようとする森本先生。芸術と文学に通底する人間の豊かな精神活動の世界に私を誘ってくれたヒューズ先生。他人の存在自体を受け入れ尊重し、分かり合えない他者と共生していく喜びを養ってくれた4年間の寮生活。そしてこの社会では自由すぎる私の生き方に理解を示し、支え続けてくれている妻との出会い。今の私の人生と芸術活動のベースが形成された貴重な時間でした。

卒業した1999年は、バブル崩壊後の就職氷河期真っ只中。銀行に就職した優秀な先輩たちがどんどん銀行を辞めていくような時代でした。そんな時代だからこそ型にはまった生き方ではなく、自分のやりたいことを追求するべきだ、という自由な空気があったと記憶しています。しかし、芸術家になるというプランはちょっと無謀すぎたようです。随分周りの人々に心配と迷惑をかけました。また随分助けられてきました。おかげさまで、どうかこの20年間、自分を見失わず、ICUで蒔かれた問いに水を与え続けられてきたと感じています。現在は、国内外の美術館、美術展、ギャラリーなどで、主に映像を使った美術作品を発表しています。

私の作品は、決して心地の良い、綺麗な絵画などではありません。また一様の美を押し付けたり、ましてや「美しい国家」を表象するようなものでもありません。私の作品は、人間の疑問と混乱と迷いに満ちたものです。個人の善意や美しさと共に、汚さや攻撃性、そして集団心理が生み出す暴力や無責任さを描き切ろうという試みです。時に常識を疑い、社会への批判を投げかけ、権力と権威をあざ笑い、タブーにも触れ、人々が見たくないような現実をも忖度なく空気を読まずに描き切ろうという試みです。そうすることで、敵一味方や、国家、民族などといった枠組みを超えた、個人と個人が対峙できる小さな場所を、この混乱した世界に作る事が出来るのではと信じ活動してきました。

しかし近年、この国では社会批判を含んだ作品を発表することが困難な時代になってきています。昨年起こったあいちトリエンナーレ2019をめぐる検閲問題は、政府をも巻き込んだ形でこの状況に拍車をかけました。「表現の自由」とは決して芸術家が好き勝手表現する権利の話ではなく、「言論の自由」、「報道の自由」、そして私たちの「知る権利」と繋がる民主主義国家の根本であり、社会の多様性を担保するためにも、また人類が平和に共生する上でも絶対不可欠な自由です。この萎縮した状況をなんとか改善するために、昨年来、仲間のアーティスト及び関係者と抗議/啓発活動を積極的に続けています。その活動中に、様々なフィールドで活動している方々との新たな繋がりが生まれているのですが、どのような場に行っても「私もICUのOBです」と声をかけてくださる方が多いことに本当に驚かされています。ICUで蒔かれた種が、時と場を隔てて、新たな連帯のネットワークとしてこの社会に根付いていることを実感させられる瞬間です。

まだキャリアも志しも半ばの私が、このような立派な賞をいただいてよいものか正直迷いました。しかし、私のような生き方もあるという一例を知ってもらうということ、そして、この窮屈で混乱して

いる時代に悩み、葛藤し、戦っているOBの方々や現役生に、わずかでも励みや望みになってくれれば
と願いこの名誉あるDAY賞を頂くことにしました。まだまだやらねばならないことが山積みですが、
これからもICUで蒔かれた問いに真剣に向き合いながら、観る人の心を動かせるような作品を作り続け
ていこうと思っていますので、どうぞご期待ください。

この度は本当にありがとうございます。

山本 和奈 YAMAMOTO, Kazuna

19年アーツ・サイエンス学科卒業

「私だったら絶対にICUで勉強したいな」と母に言われた言葉をきっかけに、ICUへの進学を決意したのが、私の4年間の始まりでした。

広いキャンパス、少人数制の授業、何より多様なバックグラウンドを持つ色々な人が集まるICUで学びたいと思い、その選択は卒業してからも間違っていなかったな、と思います。

一番私が影響されたのは、留学をしたこと、留学をして帰って来た最後の1年間でした。

スペイン語授業のキンテロ先生に「チリに行ったら？」と言われ、「まさか」と言っていた自分が、まさか本当に日本から一番離れた留学先を選ぶとは、自分自身も親も、思っていなかったことでした。スペイン語の能力が足りなくても、「とにかく行って来なさい。なんとかなるから」と背中を大幅に押してくださった先生には感謝してもしきれません。

チリに留学をして、初めて自分のComfort Zoneから出た1年間。スペイン語がわからなく落としたマクロ経済学の授業も、今はいい挑戦でした。この1年間は、本当に自分自身をチャレンジすることができた実りある年だったと思います。

人生においてやりたいことが明確になり、自分がどういった大人になりたいかを考えることができた1年間。その1年間があって、そのあとがあったからこそ今があると思います。

留学から帰って来て、とにかく最初は起業で大忙しでした。経営学の知識がない状態からビジネスに関することを全て学びながら、夜な夜な何十件ものメールや企画書を書いては、時間があるときは様々な人に話を聞きに行く生活。

卒業論文の定期ミーティングには、毎回アドバイザーである斎藤潤先生に頭を下げながら「また進みませんでした」と何度言ったのか、今でも申し訳なく思います。ただ、そんな中でも自分が立ち上げていたNGOのイベントに足を運んでくださったり、卒業6ヶ月前にまた新たな活動を開始した自分に「活動応援してるよ、ただ卒論もお願いだからやってね」と支え続けてくださった斎藤先生。

こうして、尖った自分の性格や何度も変わった卒論のトピックに対し真剣に取り組み、向き合ってくくださった教授がいらしてくださったからこそ、「またICUで学びたいな」と今でも強く思います。

そしてICUの4年間の幕が閉じる瞬間の卒業式での日比谷学長の言葉。

「この場にいることを、当たり前として思っはいけない。ここにいることができる貴方達には、責任があることを忘れてはいけない。」

ICUの卒業生であることに胸を張りながら、現在の社会に存在する様々な問題、搾取、格差、暴行などに立ち向かいながら、誰もが共存できる、誰もが取り残されない社会をつくり上げるために行動したいと思います。

世界は、思うより小さいです。そして様々な所にはICUの先輩がいます。

ICUのAlumniであることにより、様々な機会があったり、様々な先輩方に助けられてきました。

自分も、同じように貢献をして、これからのICUの卒業生、在學生に同じように手を差し伸べられたらいいなと思います。